

ずいそう

恩師を思う

大 下 裕 之



恩師という認識は後から生じてくるもの、歳とともにその存在が大きくなっていく。社会人として44年間、前半の22年間は土木事業に、後半は環境修復事業に携わっている。ともに継続できたのは恩師に拠るところは大きい。前者は“土質からのささやき”，後者は“地質への誘い”がきっかけだ。双方によって土質と地質がこうも異なるものなのかを肌で感じる事ができ、さらに彼らの教えは人間形成にも役立つことができた。

最初の恩師は土質工学専攻の教授であり、工学的視点から土砂を診断する思考を教わった。旧建設省出身らしく社会へ旅立つ予定の学生達にとって理解しやすい実務型の講義内容を中心に、自著である「土木施工」（朝倉書店）や「建設機械」（理工学社）などの実務書を使って教鞭を執られていた。当然ながら土質工学に係る数多くの研究実績をお持ちであったが、教授部屋の窓際にはなぜか建設機械のミニチュアが隊列を組んで飾られていた。一見すると気難しそうに見える反面、純粋にそれらを愛する好奇心旺盛な少年っぽさも持ち合わせていた。お酒も嗜み、当時は高級品であった“だるま”を腕に抱え、欲しければ部屋へ来いと云わんばかりの顔つきで、薄笑いを浮かべながら入室していく姿をよく目撃した。時には放課後、ゼミの准教授や助手らが部屋に集まり、研究内容や役人時代の逸話などを酒の肴に話が盛り上がっていたようだ。寡黙ではなかったが、無駄口もなく淡々と質疑に答えていただけの先生であった。この分野では顔が広く官民隔々まで熟知されていたからこそ、社会を知らぬ学生達からの踏み込んだ質問に対しても、苦い顔をせず具体的に答えてくれた。まずは自分の教え子達に土木就労の楽しさとやりがいを伝えたかったのであろう。卒業の挨拶に伺った際、「苦勞するだろうが」を前置きに、「マンモスのような大型建設機械を使った土木工事や海外工事もそうそう経験できることではない。興味を持てるかだ。」の言葉は今でも耳に残っており、これが“土質からのささやき”となる。入社後はそれらに加え、都市土木で使われる大型特殊機械まで経験できたことは幸運であった。当時はまだ業界特有の3K時代、おそらく恩師は田舎者で軟弱な私では続かないと感じ、

ならば興味が湧くような言葉をと贈ってくれたのであろう。あのささやきで結局のところ、幅広い建設機械や施工技術の知見と経験を蓄積できたばかりか、工事現場の辛さも乗り切ることができ、計画から施工前線に至るまでゼロから構造物を造り上げる喜びも体感できた。

それから時は2003年、バブル崩壊とともに下降を続ける建設業界にとって注目され始めた環境ビジネスへと足を踏み入れる。当時は土壤汚染という言葉が世間に広がり始めた頃であり、地層汚染や地下水汚染などの地質汚染対策が焦点となった。この世界はそれまで経験してきた土質の概念は通用せず、代わって地質の概念が求められた。戸惑いの中で出発したが、実学を通じて地学をていねいに説いてくれたのが次の恩師となる。地質汚染対策を正しく理解させるために、化学や社会学も含めたサイエンスの基本理念を最初にたたき込まれた。自著である「地質汚染 調査と浄化技術」（オーム社）は通り一遍の概論書でも技術解説書でもなく、真面目に取り組もうとする技術者のための入門書として、それを一読したことでこの分野を築き上げた先駆者の足跡の一端を垣間見ることができた。とにかくこの方は地質が大の好物。巡検の度に地質を四次元で読み解く演説姿勢やコア試料から五感を駆使して地層や汚染メカニズムを解明する術には衝撃を覚えた。さらに、大型建設機械が身近だった者にとってボーリングマシンは新鮮そのものであり、その中でも華奢な女性が操作できる小型ボーリングマシンは動力100Vでコア採取が可能。そして自らサンプリングすることにより、地質汚染対策に従事するにはオールコア地質ボーリングによるコア採取と層相変化をミリメートルオーダーで観察する能力がいかに重要かを痛感させられた。ある日の酒席で、恩師は土壤汚染対策法で定義されている第二環境基準について言及された。世の実態として、同法では環境基準値の10～30倍をその値と定め、それに該当する汚染土壌の処理・処分は掘削除去して最終処分場へ持ち込む事例が殆どとのこと。10m区画で調べて基準値以下ならば問題なし、そうでなければ区画内すべてを汚染土扱いして数量を嵩むやり方も横行しているとのこと。いつの時

代もルールを制するものが経済を征するというのか。このような科学的根拠に乏しい構子定規的な法定調査法に基づき、汚染土として高額な処理処分費用を掛けさせて最終処分場へと持っていく現実をどう評価するか。環境基準値を超える汚染物質の埋立事業を民間に委ねて良いものか。扱い方によっては資源として再利用できるではないか等々、多くの課題が山積していると熱弁。恩師が嘆くこれらの課題はサイエンスの基本理念をたたき込まれた一員として看過できない。加えて、技術面では人の病を治すが如く地質汚染を読み解くおもしろさ、これらが“地質への誘い”となった。地質汚染対策はとても奥が深い。自然科学をはじめ多くの知見を求められる。土木工学もその一つであり、建設機械を利用することだってある。但し、最も大切なことは、環境に関する理念を十分に理解して処方を身につけ、行動することだ。時には工学的な進め方に妥協できないこともある。未だ端くれの愚拙にとって、あの誘いにより環境保全に携わる旅は今も続いている。

ところで、いずれの恩師も酒好きであることはさておき、両者に共通する点が二つある。一つ目は「実学こそ肝要」だ。福沢諭吉は「学問のすゝめ」の中で「ただ知識を得るだけでは学問を修めたとは言えない。これを活用・実行し、世の中の役に立つことに重きを置かねばならない。」と説いた。物事を考える「識見」と、それを実行する「行動力」にこだわった考え方であり、まさに恩師らの成果はそうやって確立されていったのであろう。二つ目は好奇心旺盛かつストレスフリーな生き方である。好奇心は集中力と持続力を生み、ストレスのない強靱な神経は明るく楽しい行動に結びついていく。脳科学によれば、脳機能の低下を防ぐためには好奇心を持つことと日常のストレスを取り去ることと云う。ストレスを取り去る方法は都会から離れて田舎や森を散歩して遊ぶことだそうだが、彼らには生まれつきその能力が人並み外れて備わっていたとしか考えられない。

では私など凡人にとって、彼らとの経験をどう活か

していくべきか。何よりも土質と地質、工学と理学、それぞれの道は異なっている、その時々でうまく使い分けていくことができるのは強みだ。社会を見渡せば、多くの個別問題に直面している。行政依存からの脱却、上下水道のあり方、ビル低層化と森や里山との調和、街の廃墟化と開発による環境破壊、残土問題と悪質盛土、廃棄物の減量化、汚染土の資源化、エネルギー事業のあり方など枚挙にいとまがない。これらは相互に関係していることであり、システムダイナミクスなど大局的な視点で次世代の社会システム構築に加勢できないものかと耽る。とはいえ最大の懸念は教育だ。スマホ片手に検索アプリを使いこなし分かったふりをするような全能感的な人間を作らないことだ。そして教育や指導の完全マニュアル化は画一化を招き、子ども達は“考える”から遠ざかっている。そのため、“行動する”ことも生まれない。そこには工夫もなく、健全な仲間意識も生まれず、よく学んでよく遊ぶこともなし、人や自然に接することなく、感謝の意味すら理解できない。これでは情緒あふれる豊かな人間形成は期待できないばかりか自主性も夢も生まれない。昭和半ば生まれの私などは、日が暮れるまで野山を駆け巡り、遊び疲れ、果ては飯を食う体力も失ってしまうことが度々あった。遊びは一流の一生懸命だった。ともかく、多くの社会問題に影響を与える教育は喫緊の課題といえよう。総じていずれの解決にも長い時間を要すもの、それぞれの相関・因果関係などにも配慮を怠らず前進するしかない。そうはいっても、いつの間にか人は死ぬから。だからこそ日頃から「積小為大」をモットーに、藍より青くはなれないにしても、問題意識を忘れずに一步一步解決へ向け行動を積み重ねることだ。ともに生きてきた恩師そして諸先輩方の笑顔と大らかさを思い起こしながら、拓郎が歌う「永遠の嘘をついてくれ」のエンディング「出会わなければよかった人などないと笑ってくれ」を結びに、彼らへ拝謝である。